Ⅰ 本書作成及び活用の趣旨

各国の教育水準を評価する最も基礎的な指標として、「識字率」（リテラシー）がよく使われる。これは、単に話す、聞くといった会話による意思疎通の能力ではなく、読み、書きといった文章で表現されたものの読解能力、さらには自分の考えを文章の形で表現する能力をあらわす。これらの能力により人類は、時間あるいは空間を超えて意思の伝達をはかり、これまでの人類の文明の蓄積を行ってきた。

客観的な統計データに基づき現実を正確に認識し将来を予測することは、単に国全体の運営にとってだけでなく、国民の日常生活の中でも、近年ますます重要になってきている。その意味では、統計データから客観的な現実を正しく読み取る能力、さらには統計データを用いて現状を適切に表現し、相手に正しく伝達する能力が、現代の、そしてまた21世紀の担い手である若者たちに求められている。次代を担う子供たちには、このようないわば「データ・リテラシー」の能力が必要である。

ところで、子供たちに小さい頃から統計の大切さを教える教育は、これまでも行われてこなかったわけではない。いろいろな教科の中で、数値情報の取扱い方、あるいは日常の生活に関するデータ、さらには地域や社会の現状を示す様々なデータが、グラフその他の形で取り上げられてきた。また子供たち自らが調査員となって、身近なテーマについて統計を作成するということも、授業の中に取り入れられてきた。

戦後、わが国では、統計の再建にあたり、国民の広範囲な層に「統計精神」（統計的なものの見方、考え方）を普及、浸透させることが必要であるとされた。そのため、将来、社会人となる子供たちに対して統計の有効性、大切さを理解してもらう必要があるということで、初等教育における統計教育の世界的にもユニークな試みとして、「統計グラフコンクール」が昭和28年に導入され、今日に至っている。

このようなわが国の初等教育課程での統計教育の歩みの中で、新たな一石を投じるものとして企画されたのが、この補助教材である。本書は、平成14年度から本格的に導入された「総合的な学習の時間」の授業はもちろん、その他既存の教科でも補助的資料ならびに手引書として使用していただけるように作られている。すなわち、統計データを出発点として、低、中、高学年とそれぞれ子供たちの教育段階に応じて、いろいろな形で授業を展開し、その過程で彼らが、調べることの喜び、考えることの楽しさを実感できるような教育的方向づけを与えられる内容となっている。

なお、本書の執筆に際しては、長年教育の現場で子供たちの指導に当たってこられた先生方に、トピックスの選定、さらには豊富な経験に基づいた授業展開のガイドを作成してもらった。本書の内容については、それをご利用いただいた現場の先生方から、実際に使用されての感想、あるいは本書にはないような授業の展開成果などに関する情報をふるってお寄せいただきたい。本書の作成者と現場の先生方との間での積極的な経験の交流をはかることで、今後の内容の充実に有効に活かしたいと考えている。